

## 看護師の仕事とは、他人に「寄り添う」こと 理不尽・不条理の是正には、「寛容」こそが第1歩!!

看護師として約四半世紀……。多くの患者の死や苦しみに直面した経験をベースとする宮子あずささんの著作は、看護師や看護師を目指す人たちのバイブルとして、また病に苦しむ患者たちの心の支えとなっている。母親は、現在のジェンダー平等運動の源泉ともいえる女性人権運動の先駆者でもあった吉武輝子氏。母親の教えを消化していく中で、自身も市民運動に参加。今年都議選、武蔵野市長選、衆議院議員選挙でも、精力的な応援活動を展開。人気コラムニストに、いまの日本の課題と展望を語ってもらった。



### Interview

「与党圧勝」と報じられている衆議院選挙にも、敗北感はない!!

武蔵野市長選で選対部長も務められた宮子さんにとって、今年は大変な年だったと思います。都議選・市長選・衆議院議員選と続いた一連の選挙を、どのように総括されますか？

宮子 たいま、若干燃えつき気味です(笑)。全般を通して、手応えを感じた一年でした。市民と政党との握手の仕方に変化を憶えたからです。もちろん、上手くいったところと、そうならなかったところがありますが、1つのヒントというか、方向性のようものが芽生えたように思っています。ですから、「与党圧勝」と報じられている衆議院選挙にしても、あまり敗北感を感じていません。

### 看護師・コラムニスト 宮子 あずさ

「夫婦別姓」が選挙のホット 이슈となり、古い価値観を持つ政治家が浮き彫りになった意義は大きい

手応えとは別に、残念だったことは？

宮子 私にとって今回の選挙は、選択的夫婦別姓制度が認められるか否かのワインシューと言っ側面がありました。公開討論会で、与党公明党を含め、自民党以外の党が全てこの制度への賛成を表明したからです。自民党が単独過半数を割ってさえくれば、議員立法で選択的夫婦別姓が可能になるのではないかと。そんな期待がありました。自民党が単独過半数を維持し、これが阻まれたのが無念でなりません。選挙後、立憲野党の側から、ジェンダー平等は経済問題ほど票に繋がらなかった、と反省的に言われているのは安易な考えだとも思います。特に差別される側の女性にとって、選択的夫婦別姓を含めたジェンダー平等は、切実な問題です。

野党の中には投票率が上がれば、浮動票を取り込めるといった驕りのようなものもあったように思います。投票率が上がらなかったことについては、どうお考えですか？

宮子 私は、その分析には懐疑的です。いまの若い世代の投票行動を鑑みると、投票率のアップはむしろ与党に還元されるような気さえしています。それでもなお、投票率は高くあるべき。「一票の力」の復元につながることを考えます。投票率が上がらない理由としては、選挙制度の問題もあるかと思えます。小選挙区制度は、もともと死に票が多くなり、票割れで勝者が決まる傾向があります。これを避けるためには与野党入すの候補に絞るしかありません。この絞りについて、予備選挙や決選投票といったやり方がないのか。多くの人が納得できる人が選ばれる制度に変えて行く必要があるのではないのでしょうか。

尊敬する母親との葛藤が、看護師の道を選択させた

宮子さんは、文学部を中退して看護師への道にお入りになったと聞かれています。何が自分の生き方に、変化をもたらしたのでしょうか？

宮子 この問いに答えるには、やはり母との関係性からお話する必要があります。ご存知の通り、母は日本における女性人権運動のリーダー的存在でした。つまり、当時としてはかなりすっ飛んだ女性で、変わった親でもあったわけです。私はそれが嫌ではなく、文学部入学当時は優生保護法改定の阻止運動に加わったりしていました。ところが、ここで葛藤が生まれました。仲間たちは親に隠れて運動をし、運動を通して親離れをしていきます。なのに私は、デモに行く親がデモ指揮をしていて、そこは親の支配下なんです。母親とは違う自分の存在を求めて焦りました。

そこで看護師を目指されたわけですね。看護師を選ばれた理由は何？

宮子 兎にも角にも、母親とは全く違う専門性、母親が立ち入ることができない世界に飛び込もうと考えていました。とはいえ、学費をどうするか？就職はできるか？など、さまざまな課題を鑑みて、看護師を志すことにしました。当時は就職難で、特に女性には厳しい時代。看護学校は、学費免除の仕組みも充実していま



た。いま思えば、現実的な選択をした自分に驚いています。それだけ母親の影響が強かったのでしょうか。

そこで看護師を目指されたわけですね。看護師を選ばれた理由は何？

宮子 100%、正解だったと思っています。当時の看護基礎教育は専門学校がほとんどでした。私が入った学校もそうでしたが、看護の世界を支えてきたのは、大学進学が経済的に難しい地方出身者なのです。縦関係が厳しく、母の周囲にいた高学歴でリベラルな人たちの集まりとは異質の世界でしたが、そこで視野が広がりました。

「否定」ではなく、「寛容」こそ、未来を創る力がある!!

宮子さんはコラムなどでも「寛容」の重要性を説いていらっしゃいますが、それは看護師として人の死や苦しみと接する中で生まれてきた考え方ですか？

宮子 そうだと思います。例えば、コロナ禍にあつては「罹った人が悪い」というような論調がありますが、「病気になる」と思っている人はいません。社会には、必然的に「状況を選べない」人がたくさんいるのです。なかには接するの大変な患者さんもありますが、そこを否定せずに受容・寛容して。だからといって、理不尽や不条理から目を背けていいというわけではありませんよ。

宮子 個々が抱える事情や状況が、社会の制度的なものに起因しているのだとすれば、そこは是正していくべきです。ただし、リベラルな人にも不寛容な側面も垣間見られます。「正しい論理」が先立って、他人に寄り添えなくなってしまうからです。置かれている状況は、間違いなく一人ひとり違います。だからこそ、寛容を起点に対話を生み、そこから論理を進展させていくことが、制度づくりに大切なのだと思います。

#### 【プロフィール】

1963年、東京生まれ。看護学博士。作家・評論家で女性の人権運動にも精力的に取り組んだ吉武輝子を母のもとで葛藤ある青春時代を送った後、1987年より看護師の道へ。東京厚生年金病院の内科病棟を皮切りに、神経科病棟、緩和ケア病棟の看護師長を歴任。現在は精神科病棟のパート訪問看護師として働きながら、コラムニストや大学非常勤講師として活躍。東京新聞の「本音のコラム」は好評連載中。また、大学通信教育を通じてデザイン・造形・経営情報学・法学・教育学を学び、横断的視点から市民運動の支柱にもなっている。

下記 URL にてインタビュー全文掲載  
<https://greens-japan-tokyobranch.jimdo.com>